

『宇津山小蝶物語』翻刻(一)

岡部 祐佳

作品概要

『宇津山小蝶物語』(大本八卷八冊)は、京都の森田吟夕なる人物^①が著した浮世草子である。宝永三年(一七〇六)正月に京都の栗山宇兵衛から刊行され、約五十年後の宝暦九年(一七五九)には、大坂の平瀬新右衛門(赤松閣)による求版本が出されている。^②

まずは、本作品のあらすじを暉峻康隆『江戸文学辞典』^③により紹介する。

寛文中の事、兄分に死別した美濃国の中松伊織といふ美少年が、悲しみの余り京に上つて新黒谷で出家しようとして諫められ、味気なく暮すうち鬼王寺で小蝶といふ女を見染める。伊織は小蝶の供男源七が廓に通つてゐるのを知り、小蝶の様子を知りたくその相方藤波を訪ねると、藤波は自分の叔母である事が分つたので、国許に知らせて身請し源七に添はせてやつた。情に感じた源七夫婦の計らひで文を通はし、許嫁に裏切られて出家を願つてゐる小蝶の許に、やつとの思ひで忍ぶ事が出来たが、その父に発見される。しかし事情が分つて改めて祝言を許

され、宇都山の家を嗣ぐ事になつた。二人の仲にはやがて一子右京之介が生れたので、伊織はその子の行末の為に関東に下り、その帰途菊之丞といふ若衆を得たが、ふとした風邪がもとで伊織は空しくなつた。右京之介は父の遺言に従つて関東に下り、小蝶は尼となつて夫の菩提を弔ふ。

本作品の特色について、『浮世草子大事典』^④には以下のように記述されている。

序者独遊軒友貞、作者吟夕ともに未詳ながら、京都住の貞門俳人と思しい。寛文年間の話と設定しているように、仮名草子の古風な趣向を意図的に狙つたような作品で、内容にも仮名草子の諸要素をちりばめている。序に女性の貞淑さを求める女訓物風の言辭があり、伊織と小蝶の文のやりとりは『薄雪物語』以来の艶書文範の系譜に連なるもので、これがかなりの分量を占めている。結婚後に小蝶が伊織に若衆時代の回想を聴く件には男色女色優劣論的な要素、伊織が江戸下りをする件には名所案内記的な要素がある。絵師は大森善清と推定。

ここにあるとおり、本作品は書簡体小説の要素・名所案内記的な要素・女訓物風の要素等が入り混じつた、やや古めかしい仮名草子の作風である。加えて、『日本古典文学大事典』^⑤や『江戸文学辞典』で指摘されるように、男色という近世的風俗を取り入れ、男色および女色いずれの場面においても露骨な性描写が散見するという特徴もある。以下に挙げるのは、伊織と小蝶が初めての性行為に及ぶ場面の一部(巻六「御樽肴饅頭」)^⑥である。

好清ゆきて、起もせず寝もせずで替棚なる本ども引出し見て、し

ばしすれば君も御入あり。唐紙からかみとしてた、ずみ給ひ、何とも言葉もなく片かたわきに居給ふが、少してから「も御ごしなりませぬか」「あ、こなたから俯給へ」といへども何ともなく御座ごまにより、「いざ」とて蒲団ふとんにあがれば、夜着よぎ引着せんと仕給ふ所を引よせてじつとしむれば、「またわるい事を」「何のわるい事ぞ」と膝ひざに引のせ、「扱つかもけふの日の永ながさは」といへば、「わしも恥敷はづかてわるふござんした」「さ、まづ寝ねさしやんせ」と夜の物引立つきのけ給ふにより、帯おびとけば引きせ給ひ、「扱つかおぬし様は」帯仕ながらそばなる夜着よぎの下へ入給ふを、其ぶんにして少の間心まをしづめ、うち／＼と手をやり、すりより引よせ、ほどけどもあらかにもなし。透間すきまもなく我懐わがこころに引入、雪のほだへ未まだ莊ぢやう気けにしてち、もたるまず、さながら中肉ちゆうにくな若衆わかしゅのごとし。されども下紐したひもとき給はず、「ま、よ、遅おそかれ遠とほかれ」と越方こしのこがれしうさを語り、燈ともしびにうつるらうたげたるやんごとなき御かほばせ、折かく可か咲さふな事ことなどいへば、あざやかな御口くちもとにこ／＼とあそばす時の忝かたじけなさ、背中せちゆうのほどしづかに撫なて語り慰なぐさうちに、段々だんだんの訴せ詔せう申せば、じり／＼と下紐したひも打うけて、魂たまの緒おの絶たなばたゆるほどのおもひ、ゑしやくもなふ互あひの屍しかばねをよれまつはせ／＼申かくれば、御覚悟かくごありてか、小夜せやも漸やう寅とらの刻くばかりに、よほど御苦勞ごくろうなされ、ほの／＼と明ありに。

既存の翻刻である『浮世草子刊行会叢書』巻一7は、こういった性的な描写に配慮した結果、主に作品後半部を中心に大量の伏せ字が施されている。しかし、好色性が本作品の特色の一つでもあると思われる以上、その部分を伏せた状態では作品の全体像を捉えることは難しい。そこで、好色性の濃厚な部分など、現代の価値観においては不適切と見なされてしまう可能性のある描写を含めた、全文の

翻刻を行う必要があると考えた。本稿では、国立国会図書館蔵本の第一巻～第三巻までを翻刻する。

最後に、本作品のタイトルと最終場面について、いささかの私見を述べておきたい。「宇津山」とは駿河国の歌枕であり、そのイメージの多くは『伊勢物語』第九段に負うところが大きいだろう。

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、蕪うかへでは茂り、もの心細く、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道は、いかでかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、文かきてつく。

駿河なるうつの山辺のうつつにも夢にも人にあはぬなりけり。

この影響により、宇津山は多く「夢」や「現うつ」を詠む、あるいは「蕪」とともに詠まれることの多い歌枕であった。また、同じく書名に見える言葉であり、本作品のヒロインの名でもある「小蝶」も、夢に関連する語彙であると考えられる。書名および登場人物名には「小蝶」という表記が用いられているが、版心には「胡蝶物語」と記載されている（図1）。このことから、「小蝶」が「胡蝶」を意識したネーミングであることは一目瞭然であろう。そしてその「胡蝶」は、『莊子』「齊物論篇」にみえる「胡蝶の夢」の故事を連想させるものである。



図1
巻二1ウ・2オ
(版心部分拡大)

こういつた書名のあり方を念頭に置きつつ、作品の結末部分について考えてみたい。先行の辞典類の解説では、小蝶が出家し伊織の菩提を弔う（あるいはその後自らも死ぬ）というところまでしか示されていないが、実は本作品のラストシーンは小蝶の出家と死の場面ではない。以下に結末部分を引用する。

さるにても息災なるは源七なり。かくのごとくの事共をみなく、人手にもかけずとり行ひ、兼年と送る程に七十ちかく成行けども虫腹も起らずして、比は正月はじめつかた、鶯のこ多臚にて、何心なく東山谷の草道ふみ分てしどもなくありきしが、余り寝むさにとある所にてつかりとしばし睡りて居たりしが、ふと目をあき「これはしたり」と、したる清水にて顔を洗ひ我影を見れば、いつともなしに寄年の白髪たる鬢の髪、髭は畦に成ほど皺緩み、俄に興覚てまた本の座に直り、「実もつとも理りなり。あまたの事を見送たり。見聞ばかりか手に掛たり。誠なるかな、幾ばくの沙汰。はじめあり終あり。生あり死あり。善あり悪あり。明るは暮るに連だち、密は顕る、事を願ふに似たり。小きより大きはなし。俗あればこそ出家。人を扶る武士、本民の守なり。頗おのれはいかに。扱もいなものじや。うつかりひよんとなりしも髭白きゆへ」と、木立を見れば花かんばしく、座する所は梅の切株。(巻八「大見の目寝」)

年老いた源七は、山中の梅の切株で居眠りをして目覚めた後、顔を洗うためにのぞき込んだ清水に映る自らの姿に興ざめる。そして再び同じ切株に戻り、始めと終わり、生と死、善と悪、俗と出家など、この世のあらゆる事物の表裏一体性について思いを巡らせている。

この源七の「目覚め」が最後に置かれることで、それまでの物語

内容すべてが源七の夢であったとの読み方が可能となる（むろんこの場合、全くの夢物語というのではなく、夢の世界における過去回想と解釈すべきであろう）。「宇津山」「小蝶（胡蝶）」という言葉が持つイメージと響き合うことで、夢と現実の曖昧さ、現実（人生）の儂さを暗示する最終場面となっている。またここで示されている、一見対立関係にあるもの同士を一元的なものとして捉える源七の価値観は、万物の斉同を説く莊子の斉物論の思想に通ずるものといえよう。深い理解に基づいているかについては慎重に考える必要があるものの、本作品が莊子思想の影響を受けていることは明らかである。

凡例

- ・ 底本には、国立国会図書館デジタルコレクション上で公開されている国立国会図書館蔵本（請求記号：京・233）の画像を用いた。挿絵の引用元も同様である。
- ・ 原題簽には、各巻ごとに書名の下に副題が記されている。これについては、（副題…）という形で各節の見出しの下に示した。なお、底本で原題簽が確認できない場合は、早稲田大学図書館蔵本（請求記号：へ13 0846）の画像を、早稲田大学古典籍総合データベースで確認した結果を示した。早稲田本を参照した結果を記載する際は、（副題（早）…）という形で表記する。
- ・ 私に清濁・句読点を付したが、底本の仮名表記を漢字表記に改めることはしなかった。
- ・ 漢字は原則として通行の字体に統一したが、必要に応じて元の字体を残した場合もある。
- ・ 踊り字はそのまま残したが、合字はすべて開いた。ただし、踊り

字の「ク」は「々」に改めた。

・目録・書簡・和歌・狂歌・俳諧等は改行し、目録は一字下げ、他は二字下げで示した。なお、和歌や俳諧・狂歌などの上部に、分かち書きで文章が書かれている場合は、できる限り版面に忠実な字配りを再現できるように翻刻した。

・章が変わる場合には改行し一行分の空白を設け、章題は三字下げで示した。

・底本の丁移りは（1オ）のように示した。

・序文で返り点が欠落している部分に関しては、【】に入れて適当と思われるものを補った。

・会話や心中思惟は「」に入れた。また、会話や心中思惟の中に別の会話や心中思惟が入る場合は、『』に入れて示した。

卷一（副題 早）苗代水

宇津山小蝶物語

序

絹屋の手代が糸結をうかめしを賤敷にはあらで、問屋の女房の男むすびを心得顔なるも誉とは成なまし。人は美敷形も思慮なき科に穢し、世は忠涌の塵塚も艶有言葉にて清むとかや。生者必滅の（1オ）船に乗、盛衰之乍二楫取一喜怒哀楽の月に道を求めんとすれば、恋慕愛執の波風のために仁儀礼智之傾燈。主二迷心之レ、然も邪の苑に招人。かりにも誠深き契りこそ、いと奥ゆかしけれ。都て当世の人真実なし。とりわけ女の道はかられずも無下に乱しこそ物うけれ。 独遊軒友貞序（1ウ）

宇津山小蝶物語第一巻目録

子 曰笠懸小車

何心もなく鳥指に行まひか
此薬はおれには毒かや
黒谷の法師も少はおしかる

姿見の絹笠山

蠅もすべるか塗足駄
捨金百両は参会の暁でも
一文で吞次第は伏見の夜船の茶（2オ）

塗笠付編笠

北野に沢山な女筆の絵馬
八重の帯とは何の事ぞや
たもとに残る土筆

同言多観音経

歌のいらぬ辻うら
籠かきはそれにかしこし
名さへなつかし比は夏ざれ

三ツ若き伯母様

疾ふ立は一五三の中
金鏝はなげふしの拍子どり
けふは我身の上明日からは身揚げ（2ウ）

東路の若草

花の露徒に吸虫は、そも嫉みながらも悪からじ。月の桂は曇らねど、我仮ながら仮ならぬ、心の雲の晴間なき、晴ぬ間ぞ命なり。爰に寛文中の事かとよ、美濃の国関が原の辺に中松伊織といふ者あり。彼が幼稚名は三葎卷之丞とて、みよし信左衛門時連が末子なりしが、十二才の春の比より浅山弁座衛門といふ血を別ぬ兄をもと

め、おちても末に砕さる鳴音すごき谷水の底より底の気を通し、花と紅葉の木の間ふく風も通さぬ思ひにて、世上に耳も目もやららず、人目のぶの窓の隙、笄は折やすく呉竹のよのしげきとや。初は里山の園の鳥を庭籠のために誘ひ出、或は浅瀬の魚をつり、今は硯の海ふかき、適々(3才)逢で暮る、日は、筆喰しめす口の中、琢たてぬ糸切歯におもひを残し、間垣のしほり戸ゆひつけて、立名も袖のほころびに、まさきのかづら長く汲、鬢水の雫たくましく、万劫の亀もやどれとうちはあ、身ぶり風俗もまじりまじりまで、片物数寄もあらばこそ、證據もなきねたれ草、打つけの枕のねすり言も、「せいもんにくし」と思はれず。御法の鐘に答はなけれども、別の床に深きおもひ、一度も名残の浅き折もなく、帯引たつるにうたてく覚るも人には語で、肌衣にとむる薫ひも我俣に聞はこそ命がけなる中なりしが、十四才の夏のすゑ、兄弁左衛門脾虚の体に見えければ、物も心にいらばこそ鳥の鳴も耳にしみ、た、かぬ社も(3ウ)なかりしかど、同秋の中つころ、萩の下葉の露切て、繋がれぬは世のなごり、おしむべきは二十七、護つめたる別れなり。包にあまる袖の海、誰かこととふ松の露、落ばや真砂子のゆふ嵐、夜ののふし戸に聞物は、老木の洞になく梟の声も物さびしく、心病と見せなまし。夫よりもたゞうかくと無端、櫛の雫わが泪、何れかしれぬ墓参り、「まさなふも我を捨ゆかせ給ふ物哉」と石塔ゆするぞしほらしけれ。父母もなどかはそれと知り給へば、いろくの諫事、折ふし中松の家の世継に乞給へば、十五の春彼元に移られしが、世俗の望あ

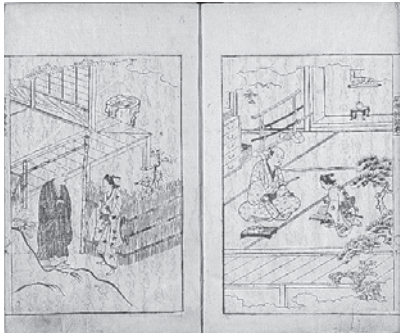


図2 卷一 4ウ・5オ

らばこそ、只別れにしようさつらさ、つかの間も忘れず、篋の剃髪筆の跡、たゞ捨置んも心うく、「いかなる寺へも納つ、我身も墨の袖となり世を(4才)【挿絵】(4ウ)【挿絵】(5オ)いとはん」と、夕間暮みやこの空へと登られしが、新黒谷の草庵に立寄、こしかたの事どもを寸計くに語り、「いかにもし御慈悲に沙門になしてたび給へ」とさもしほくと頼給へば、主つぐぐと聞給ひ、暫く黙念として物をものたまはざりしが、「実最愛や。いまだ年にもたらずして、はるぐの一人旅。さぞや男色の深き契りとこそ見えたれ。まことに美少の道ほど実多きはなし。何様心かたちの艶なる風俗かな。尤望に任せたき物なれども、見れば只恋ゆへに、何のわかちもなく世を短く見切給ふと覚へたり。当山にも楚忽に髪を剃弟子にする事成がたし。年月を重ね馴身ては何とぞ披露も致すべし。某も本は同国まき田の者ぞかし。分てあしくも(5ウ)おもはねば、先々愚僧にまかさされよ」と等ぐの物語して、「都柳原の辺に所縁あり。是にてしほし九重の人の有様をも、世のことはりを見習ひたまへ。つれづれには某が庵室にて、一篇の念仏をもゑかうしましめて、なき人の御菩提を弔ひ給へ」と甲斐しく諫られ、理り責て破られぬ。きのふと過けふと暮、虚数月日を送られる。

都の西に籠る勉強者

世も人も情一つよ中ぐに、なじまぬ人に馴初る、見なれぬ背戸の藪垣も、いつ茂るとは思はねども、頼法師に身をまかせ、春秋を経て二十一、浮世の業を見るにつけ、貪るふりの見えざるも、どこぞの程に紅裏の、(6才)襟につかぬはなかりしを、「穢しむさし」と思ひとり、手馴ぬ町屋経営に、余りに心尽しなる。「あ、精つきや」といふつげの鳥のなく音も春来れば、さがなや嗟の奥になる、苦し顔なる鐘の音も、「わが無常ぞ」と身に染て、当所もなげに運足、船岡山や鳴瀧の、替らぬ松の色見れば、昔にちがふ我姿、破れ編笠

の慥らはぬ、九折なる畔伝ひ、鬼王寺にこそ着にけり。先仏前に参りつ、前なる茶屋のくら懸に、「御めんなれ」とて尻をかけ、しばし時こそうつしけり。かしこを見れば、黒き女の塗木履、繻子の鼻亭の一切くと、我有兒にはあらねども、好清是に心つき、内陣の茶の間を遙に見渡せば、年の比十四五と打見えて、さまあしからぬ女郎の、肌には(6ウ)何をか召れけん、白き綾子に墨絵にて、肩より右の打こし迄は雲に雲雀の入風情、裾に茅のちらくと居去小松を応答せ、左の裾の噫気半に鬼の頭を、何となくいろを風仄にくまどりて、物の上手が書たりけり、浅ぎのふきぬきひつつかみ、一メ占て召されたり。ひ翠の竿中とりて、腰の上まで投げかけ、生れつきより面瘦て、仏前に立より給ひ、しばらく礼し香花をとり、紅際炭のふぜいもなく、揃へぬ眉の黒くと、人めをしのぶ目づかひにて、客殿の廊下に待給ひしを、伊織つくくとうちまもり、「いか様此君も我ごとく、よをいとひ給ふ体と見えたり。何にもせよ、節々のけだかさ立振舞の品形、ものいはね共心ねの見えすくやうな(7オ)情ぶり。かゝる手際もある物か」と茶やのか、に何となく尋ぬれば、「あれは去方の御娘子なるが、出家の望ふかく、此寺に引籠りおはしまし候へども、御父母子の合点なきにより、あのごとく月に廿日はかりは此寺に、この二三年も御座候が、委事は存ぜず候」と語りけり。中松聞いて、「さて御親もとは何方にて御座候ぞ」「二条京極の辺と申つたへ候」「扱又その御先祖は何人にて御入候ぞ」「されば古はよしある御奉公人にて御座候へ共、去事候て只今は町人なみになりて御座候よしに承候」「扱此所へは何と仕たるつてにて御出候ぞ」「さればこそ此寺の深栄と申比丘尼、彼御家にはなれ、それ(7ウ)より剃髪いたし此寺に居申され候。今も則此人の子息あの御家に奉公いたし、三十計成男にて御座候が、折くあの娘子様のかいぞへに参られ候。内外ともに此仁次第にて、文武

二道の人間と承りおよび候。何様世にも全輪敷事どもおほき事にて御座候。「わたくし風情の者などが、あの子様のやうなる娘を持申さば、よき大名道具にて御座候はん」と、此辺の評判も口々に申候。ほんにそれは、物ごし迄科能御子にて候」とて四極山の事まで取集語り、ひたもの茶を汲てさし出しけり。伊織あくまで語らせ聞ば、なを胸こそばゆくなりて、「扱もか、様のものがたりに草臥なをり申せし」と、賭ひきぬきおしげなく取らし、常の家(8オ)

【挿絵】(8ウ) 【挿絵】(9オ) 路に帰りけり。

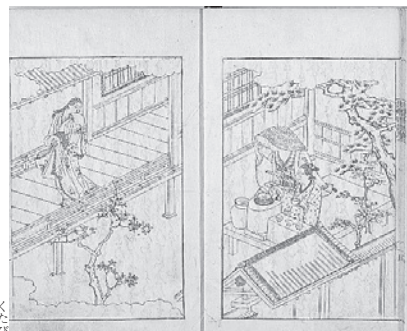


図3 巻一 8ウ・9オ

浮たつ雲の恋風
さる程に、松の葉もいつしか二つ粗初る、今は一つの中松は、此七ヶ年がその間、秋津嶋がその中に男女の数おほけれど、浅山弁左衛門忠栄が情により、宜敷悪敷共に見もやらず、小縁にも男自慢はなけれども、己と心を引沈、こと更女のみちとしては、疎々敷もはちがはしく、足を休むる柳原、「しなへて雪や風折れのせぬ命こそつらけれ」と、友なふ物は木枕を一つ愛して暮せしが、日外嗟峨の敷陰にて小蝶の前を見初しより、只何事も身に染まず。君はいかなる敵のすゑか、心息まずいとまなく、又たどくと名にしあふ、うき名のた、ば(9ウ)立次第、浮岩出つ、行程に、彼寺近く成しかど、もはや以前の水茶屋にもさきは何の気もつかねど、心ひかれてしほくと垣の外面に躊躇して、しばし時こそうつしけり。折こそ来れ、彼娘笠ふかぐと着なしつ、御供には深栄の尼一人、また少跡

より下女一人、なるほどふつ、かならざる男一人さして、はでなる咄もなく打連、京道に懸り給ふ。「扱こそ」と態ならぬふりにて跡につき伺へば、北野近くなりしに、かの女郎清き流れにて嗽手水遊ばし、神前にて屢御折念ことおはり、宰領のおとこ源七を近く召て、「七才の女小蝶筆」とある絵馬の蜘蛛の巣に、松の葉すこし散か、りぬるを扱はせ、「扱も幼稚かりし時の筆の跡、拙なき(10才)墨のつきやうや。左皆の願もなきに、今はあだになりし」と計に無人望すぎさせ給ふ。伊織見て、「是こそ此君の御手跡なり。不思議に拝み奉るうれしさよ」と打詠め、心言葉も及ばれず。文字うつり墨継まで何方に目もなされず、「御伎倆にさらなり」とひとりごちして立のくうちに、早いづくともなく見失ひ、殊更時しも二月廿五日、所せく群集して、「南無さんぼう惜しや」と虚く有所に帰りけり。

猶子堪忍記

されば「智者はまどはず」といへども、うたてやな、白き糸の染まん間こそ心にくけれ。見し袖のうつらふ陰のもじやくと、いかなればか程まで、みちれちれなくもほれたるぞ。余りの事に、「しほし忘る、隙もがな」と、学たけ(10ウ)高き聖人の本に携はり、孔子の文に心をよせ、又は経論の窓に眼を曝といへども、色欲の剣に切たてられ、しのがればこそやるせなや。兎角この事なるとならずと「世をこれ仕舞に」と、又煩惱の綱に両手を掛力足踏で、彼二条京極と聞こそ手懸なれ。また姫の御名も大方知れたり。家老の源七郎こそ紛なけれ。「喩は鉄の唐櫃にあればとて、何条本望送ざるべき」と心を摧くその風情、降雨も闇の夜も、君ゆへならばつらからず。百日ばかりうそくと、辻占聞にことならず、こがれありくぞ怪しけれ。比しも九月初つかた、秋の名残に蔦の葉の黒き羽織に一ツ紋、憤懣さふな足本にて、雪踏に摺る石なども覚えまじきと見

へつる(11才)が、押小路御幸町を南へ行を打上見れば源七なり。頓て半町ほど跡にさがり、つがもなく慕ひ行ば、三条白山の辻にて、編笠着ながら駕籠に乗、恋の重荷にかたかへぬ、三人追に矢のごとき、「己ならくの底迄も」と留息つい得つけたり。甘草陣の時を得て、恋楯籠る女町なり。見え隠れにて、さりととも思ふ遣亭に近づき手軽く尋れば、「あれは此うちの一文字屋と申に藤波様とて、松までにも侍らず、若梅の大尽様」と聞よりかたじけなし。「これも北野の御利生か」とひつ返し、先我もとに帰りけり。

白拍子に筋目なし

夫清らかなるものには物の影の移る事鮮なり。箒(11ウ)ちぎりたる座敷へ一房の牡丹を捨てに似たり。さしもの伊織忽に女色の氷に閉られ、住家も俄にしやまだるく、誰かこと問多にしもなく、心ぞ狂ふ豊算、定と思案を究め、始て見たる遊女町、所にも遊君にも何のおもひはあらねども、彼かいまみの恋草に、露の便をもとめんと、骸は封疆のみち野辺に、さらさばさらせさらくに、人の心のうき橋を、あやうき迄もふみこみし。殊更所もだてにして、彼藤波が科形もとより名高きを便りに、折ふしは統買又ある時は一ツ買、其年も暮になり、明れば正月松の中にも氣を通し、もんどくど、態よけ、廿三日と申には、古草の秋よりかぞふれば十七度に及べども、いつしか膝をも直さずして、肘まくらさへ(12才)かたむかせず。さればとてひねりたる気色もなく、只艶くなれ馴身、またおくしたる振もなし。ある時は有為転変のはかなき事など、言葉少はなし。心ながく、「もし源七が噂もや出よかし」と氣をつくしすこしたりしが、藤波ふしぎはれやらず、「何にしても此男世のつねの者ならず、魂のつよき事はかられず。いかなる心ありてわが風俗を見すかす事もありや。哀れ龍宮の髻が来たればとて、さまでのこともあるまじ。さりながら限見届ぬもくちおし。打くだかばや」

とおもひ、折から春雨に千本道もひそかなれば、いつよりも雨に愛を催し、「性がつきた。少酒あがりませぬか」と盃とりあげ下に置、「こなさんに問たき事ござんす」「何事にて御座候ぞ」「まづかた様は(12ウ) いづくの何人にて御座んすぞ」伊織聞て、「これは改りたる事かな。それとて何になさる、」「わしは合点がいかぬわいな。此里へ何等の殿達も御座んすけれど、終にそもじ様のやうなは聞も及ませぬ。まづわしを何とおもはんして来て下んすぞ。どふでも今日は少咄しを聞ねばならぬ。御前の心体ほどおくぶかきはない。本に心つよい御かたじや」といふ。「はてわけもない事、じたい身どもは江戸ものでござるが、古郷にては此遊女町と申が吉原といふ所でござる。内気者ゆへさして握り覚た軛もござらねど、君傾城といふものも必ふかき男ありて、外の客はうたてくも邪魔なる物なれど、勤の事なれば『あ、此やうな事もはやいふまひ』とおもへど、まづ此男は此里へもはじめて参りし事(13オ)【挿絵】(13ウ)なれども、恥しながら貴様に少心ありて、折くあそびにまいれ共、何の差別も弁へませぬ。若ふかき知音などあらば、裏ますとも御はなしなされ。神八幡心は替るまひ。成ほど御為になるやうに誘く心底でござる。もしもさもななくば、『われらも年月の心中を御目にかけて、御氣に入時節もありや』とばかりおもふ事候。何とやらおもしろふなつた。一ツ吞まじよ」藤波聞て、「さればいな、其御心の様に見て進ぜやしたによりての事、わしも源様といふてたんと可愛おとこが御座んす。水あげからの馴染にて、一日便りがなければ鉢巻のいるほど髪がうちます」「む、さふで御座るとも。それを聞てから猶また大切にす気でござる。此うへは敵様とも知付け(14オ)成まじよ」「まづ忝なふござんす。



図4 卷一 13ウ

あ、もはや此うへじや程に語りまじよ。つとめほど悲ひものはござんせん。そもじ様のやうなはずくなふござんすにより、まぶらしき事が見ゆれば客様がたの機嫌がそこねます。聞やいなや、やりてか親方へ悪様につけます。禿ほど口がましい物はなふて、迷惑するをうれしがりて、頓而身に酬ふ事なれど余所の事までいひます。是につけても口おしうござんす。と様やかく様の不慮に難儀さしやんしたによりて、わしは賤しい者に養はれしゆへ此里へ来ました。親たちは皆死なしやる。聞ばわしが姉様が一人ござんすげなが、美濃の国関原といふ所の賤からぬ方におはしまし候よし、さるものが申ましたが、是も無事にて御座りまするか知りませぬ」伊織聞て、「や、其美濃の姉子の御(14ウ)座る方の名名字は知れませぬか」「さればみよし氏の某と慥に承りました」「や、是はいかなる事。知らぬ事とてわけもない、それがしは其みよしが子。さすれば御前は、わしが伯母君にて御座候」「扱もくおもひよらずや」「扱はさふであるか。御心やすくおほしめせ。母様つねく御まへの事は、なるほど末の妹一人上がたにあれども、行衛知れぬ御うはさ而已でござりました。彼是聞ぼうたがひもなし。御氣遣なされますな。下拙美濃へ下り、やがて御むかひに上りまじよ」「やあ、たのもしや」「扱も伯母様の機縁によりてと言ながら、面目もなき座敷つきじや」「それならば何とぞして、此苦患をのかして下され。その中は沙汰なしにまつぞへ」「はて扱そのゑどころで御座りますかいの。たのもしうおほしめせ」とて、取物も取あはず本国に帰り。一之巻終(15オ)

卷二(副題) (早) 名女講談

宇津山小蝶物語第二卷目錄

是より直大津留

文を遣る程悪線をする
見とれて算直すまくり木
巧ほどに逢時はいはれず

夢に見竹生嶋

三味の音に勇吉田の町
首尾が能て皆いふた
おもひ寄なき中立がほ (1オ)

怨る君に錯もなし

壁に耳、くさの物いふ世のならひ、藤波が新客たちなきゆへに、近き比身請してそふべきよし、何方ともなしに密くと、其かくれ荒磯の波の高橋源七は、此事そよと聞よりも胸もさけぬる心地して、「頼すくなの浮世やな。かく有べきとは露しらで、心の肌を打割て見せたる事の口おしや。実遊女の空言を頼みけるこそ後悔や」と思ふにつけても、つくぐと偽りのなき世なりせば、いかばかり是を我身の懲めとして、沈む心にあぢきなく、衰れはつるぞもどかしけれ。藤波はまたくどくと「此事とくと仕あふせて」とはおもへどももだへかね、「人にかくすも君ならで、誰にかいはん末の松、若も翠の広き野に、(1ウ) 出ばや花の酒もりも、心にまかす事もや」と、此ほどは源七も何としてかは見えざれば、「ちとく語る御事あり参らせ候ほどに、遠からぬうちにまつにて候」など度々文にいはせども、「終にいなせもなかなぞらになりしが心もとなや」と気遣ふおもひぞ侘しけれ。うき世なりけり理りや、逢ねばつもの恨みの恋、人の心は仮染にすりちがふてはいなものに成とは兼て知りなが

ら、しられぬものと知りぬべし。これは都の物がたり。伊織祐好清は急ぎ古郷関が原に下り着、御一門に見参し、初終りの物がたり、「兎角 某若気のいたす所、只何事も御免し下され候へ」と引咧ひのべ給へば、御父母をはじめ兄子たち、死たる人が今爰に活りたるごとくにて、御悦は際りなし。二葉よりそだちたる古里の友達もおとなしくなりて、(2オ) 片辺の芝の庵に遣水の音を一人聞て、心をこらす桑門の軒の柳もおもひなしか老木となりて、谷の鶯も一入に声ほそやかに思はれ、「竹馬の童はいづれの家の子なるぞや」「余所の人じや」とあとなくいふも我古をおもひ出し、日毎に愁歎の墓に行て、帰るさに干あへぬ袖になき人の魂も飛入かとなつかしく、かくて日数も十日計打すぎて、御咄しの折を見て、「藤波御前の御身のうへ、不思議の縁にて聞届ぬる」と、おもてうらなく語り給へば、御母君をはじめ人々「さてもく目出度うへの悦びなり。御ぶにいそぎ京都に登り、伯母君をとくく供して下り給へ」と数の金銀を調、伊織に若党以下三人相添、片時も八十条にの給へば、「うけ給り候」とてさも声花にこしらへて都入こそめでたけれ。鳴原になりしかば、(2ウ) 伯母の藤波を身請して、四条木屋町辺に宿をとりに給ひ、今は思ふ事うちつけにもいひにく、「一先美濃へ御下りもや」との給へば、藤波聞めし、「尤いそぎ人々にも対面仕度ものなれども、忝辱ながら以前もそよとはなし申源七どのに順逢、うけてはそもじの由を語り度おもふなり。かゝる事とは知り給はず、みづからを嘸や恨み給ふらん。此事いかに」との給へば、好清うけ給り「げに御理。然らば人まかしにて不審。それがし直に参らん」と、先祖の武士に引繕ひ、国定に尋あひ、毎小間声にあかし、「いかにもしてそれがし角て有うへは本国へ一たびくだり一門に引合せ、其後はいか様にも貴公の御心に任し給へ」と慇懃に述給へば、高橋ゆめのおもひにて、「扱もく辱し。しばらく御まちな下されよ」と、奉公の身の(3オ)【挿絵】(3ウ)【挿絵】(4オ)

事なれば、それ／＼に氣を支配、中松と打つれて樵木町になりしかば、藤波に對面し、泣つ笑ふつ浅からぬ、何やらいはふとおもふたが、「それ／＼そよ」といふ中にも、あへばいはれぬ物ぞかし。その夜は一宿を究め、明れば二月廿四日、人／＼は美濃路の旅、高橋は主人のもとに帰りけり。

博き東に植替る梅

縁はいなもの、暁の寺々の鐘、夕ぐれは小篠に騒ぐ村雀、一日の間も程遠く、高はし源七国定は、知らぬ美濃路に魂の通はぬ隙はなかりけり。漸／＼として、今ははや夏の初上旬には、伊織は藤波を供なひ九重ののぼり、源七に引逢せば、高橋大悦かぎりなく、吉田あたりに裏屋を借、藤波を密しをき、忍びて逢こそけなり（4ウ）けれ。かくて過行中に国定女房にいふやうは、「さても好清が心ざし、命を遣りてもおしからじ。そもじを買い物語、いまた誠の頼れ、世界の男女にも恋の手本となるべき者。それにつき、此ほどは何とやら心むつかしさふに見ゆるが、若き者のぶらり／＼と病は一物ありさふな事なり。若西のかたにくげなどはない事か。あやし、」といへば、藤波聞て「さればわしも合点のいかぬ煩ひとおもひますれども、遠慮して居ました。まことにこなさんと此ごとく添まするも、あの者が情の道を知るゆへなれば、其氣のついたこそ幸なれ。尤伯母聲の口からちと遠慮ある事なれど、すべのちがふた事でござんす。こなさんとはんせ。それがしんみで御座んす」といへば、「む、いかに心得た」とて、或時伊織にむかひ、四極

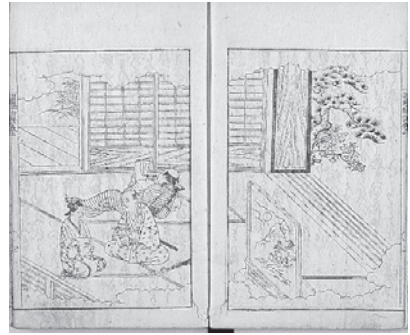


図5 卷二 3ウ・4オ

山のもの語のとり（5オ）付に、「扱も某夫婦、いま不思議に年月の望叶しもひとへに貴様の影なり。いはねども平生忘れもいたさねども、つや／＼とは申さぬ。若また何事にても此方に役にたつ事もあらば、心をかすとあかし給へ。よしわかき者はさのみ陰気なも誉られず。是も御手前の恩をふかくおもふゆへなり」といへば、伊織むねこそばゆく、聞に蔭の腸をもどらかし、しばらく物をもいはず。「よき首尾ながら、余りふかき事なればいか」とは思へども、「いや／＼此ま、過しなば、こがれ死ぬべし。最早これほどの折もなし」と、「されば首尾なくて咄しませなんだ。それがし初て嶋原にかよひ候も、あの里にはすこしも心はなく候へども、こなたにちかづきたきの余りに参りました。是もふかき女色によりての事」といふ。源七不（5ウ）思議におもひ、「それはまた何ゆへの事」といへば、「さればはづかしながら、私は衆道のいきちにより、か様／＼の事にて国を出、それより両道ともに打すて居申所に、貴殿の御主君小蝶様に賤心なくなづみ、それより心を尽しこがれわづらひ申」と初終りを語り、「及ばずながらも、『若おとこの義利合にてとり持下され候事もや』と存候所に、いまは結句申にくきやうになりまして」とせつなくいへば、源七聞て「扱もふかき心中、指当て迷惑せり。ちたいあの子の事は、幼稚時分慥九つるとき、さるかたより言号ありしが、幼きながらも互に一両度も見えつみえられつしませしが、彼男の親欲にふけり、金銀を大分持来る婦有。あの子十一の年、俄に外より呼しゆへ、さだめて其事本意なく思めし（6オ）給ふと見えたり。半年ばかり過てから、何共なし出家の望ふかく、親たちのいさめ耳に入ず。剩一人子の事なれば難儀して、此子のうばによく／＼とはすればおほはくを大方語り給ふが、たゞ兎角無常の言割のみなり。かくのごとくの族なれば、如何とはおもへども、その方の事なり。殊更姫君に添せても不足の心躰にあらず。おほひよりなき某がとり持なれば、よも人も知るまじ。文一つ書給

へ。首尾よく届けて参らせん」といふ。伊織手に汗を握りながら、嬉しくも恥敷で、「さてかたじけなき御一言、生々世々に忘れがたし。然らば仰にまかせん」と、女色の文は初なれば、うれしき心も飛あがり、筆のたて所も覚えねど、まづ一筆こそ書たりけり。(6ウ)

さらしなや、伯母捨山に照月に、木末の猿が述す手は、届とももひこがるべし。我は争かおよびなき、申も恐おほけれど、此二三年がその間、うつ、にも忘れられぬ、只つらかりし命かな。誠に古は木のはしのやうに打くらし、後世をのみ頼みしに、いかなれば我宿の母家のよもぎふ、蟋蟀いたくな鳴そ秋の夜の、長きおもひは我ならで、知らずば誰ぞ君なくば、何かおもはん歌かたの、「昔は物をおもはざりけり」と詠をかれしも今更に、我身の恋に毎似たり。さりとてもかこつべきにも御さなく候へども、責てさてかくとしらさでしげくと、朽果んこととの悲しさに、中立にたぐり寄りこそ多にしぞや。拙き筆の跡進ずるとは恐あり、(7オ) 宮中に咲花に卑き短冊付るにひとし。「願はくは、只数ならぬ賤が身の、雨に枯たる草木のごとく、やつれはてにしておもはくに、露ばかり穢れさせ給ひ、御手跡の御言のは、何と成とも遊ばし下され候はゞ、三つの大川の船守もさのみは謾り申さじ」と、呉々あふく事に御さ候。誠におもひの山に恋の淵、幾夜ねざめの明の鐘、ふね車にもおよばぬばかりに候へども、ひとつは恐れ、かつふは又身を慙てこそ筆をとめ参らせ候。

雲のうへへ人へ
人しらぬ身より
源七此文うけとりて、「折もがな」と心をはなさぬ夕間暮、比もはや文月の七夕祭る折なれば、門に梶の(7ウ)葉売つれて、君も中の間の手水鉢のもとに、夏花やうく四五日と、御心ほそげに源氏書たる団にて、蚊柱をふはくとあしらかし、御座所へつと参り、

何となく二つ三つものがたり申て居る間に、下女半下もなかりけり。本より源七、かりにも仁儀を専に心掛、外には忠節他にことなりしゆへ、其遠慮少もなし。「わたくしは昨日、築地の内にておもしろき文を拾ひましたり。御覧もや」とさし出す。姫君本より手跡に御心をよせ給へば、「どれく見せや。さても何様、内裏のながれほどありてだかき墨付や」とつらくと詠入、只ほれくくと見とほれさせ給ひ、「さても今この世に此やうなるやさ人が有事か」とのたまふ。源七聞て、「まづ御覧なされませ」とてたつ。「はて是やらふ、入らぬかや」「いりませぬ。しかし(8オ)【挿絵(8ウ) 誰が身のうへにも密すもの、引ちらして置せ給ふな」といひすて表に出にけり。

寺から里へなりし言の葉

それよりも源七は彼君のうばがもとへ行て、事悪からぬやうに有増を嘸しければ、うば多きもなき顔にて「なふ私も何とぞして、少ないとも御心を動かしたふ御座りまして、人のきかぬ折ふしは殿心の出来るやうにとぞんじ、いろくとせ、りすかしみますれども、うむにいせぬやうにおほせられ、結句こちらには面目無やうなる事たびく御ざりました。『あの時分は恥かはしき事もかえりみず、恋慕の道はうちからわひて出るやうな時分に、一流かはつたあだ花のやうな娘子や』と、つねく心気に御さん(9オ)したに、扱も情あるお心ざし。先様はどなたにもせよ、御前の御目鏡次第。今までは御自分様をこそ恐れておりましたれ。親御様たちへ知れましても、大分の御腹立は御さんすまい。此うへながら、あのやうな堅い御方なるによ、何とあらふも心もとない。



図6 卷二 8ウ

なんでも其文を便りに、こなさんわたくししてそやしあげましよ」
 「成ほど心得た。いつなりとも拙者が御供して来ませう」「ほんにそ
 れにこそ事は御さんすまい。かならずじやぞや。近ひ中にゑ」とて
 帰りけり。明石や須磨の塩焼衣、小蝶さんまの寺へ入ならば、蒔絵
 硯箱薫ひの墨で手本申さば、奉書紙の文をつくるにかやさぬ物は
 をしの生れか、焼蛤の口のあかぬはそのま、捨よ。若衆出立のか
 いら木も冴夜には重敷になり、奴婢踊（9ウ）も汗にしむ黒染の露
 しほたれて、宵のめし夜半の酒もよこ雲に吹すかし、妻を身身もし
 どけなく帰り、日中の鐘を枕に聞、若衆持身はすぐに明る夜のおど
 り髪をすきて遣り、奉公人は寅の刻に帰り臥すかとすれば、卯の刻
 に追起されても明る日の勤苦にならず。まぬけのふり出し、歌が、
 りのもどり足、音頭とりは片言まじりの俄稽古、見物の中には、去
 年まではあながちに髪を結ぶりをどり振さたせられにし娘も、親兄
 の折檻により、今年に妹の帯仕てやり、踊をへて出し、内にも
 つやく目も合す。手拍子のしやんくとうち込をとに、米かみを
 夾立てるやうにて徐々とこしらへ、「下の町へ走間が花じや。此盆で
 おどらぬが二年じや」といふ程なは、母おやが（10オ）付てさへ、
 片わきな二才どもがいなげな目つきするもそばからうたてし。殊に
 いたづらな一人女子などつけてやれば、むすめの政道はすれども、
 己はちくく後へ手をまはし、人のよろこぶやうにもみあふを見
 ぬ振して帰り、何のかのと咄しをすれば、蒲のくづれるやうに
 「夕部のおとはたしか見知た人で御さんした」などいへば、お吉
 もけなりき中にもはやしつとまじりに、晩には「宵からねよ」とい
 ふても言ばが違ひてまたいづれば、あんのごとくゆふべのたわけ付
 てまはせば、娘はわざとすりぬけて人込にた、ずめば、役にもた、
 ぬ事に揉つめられて、人に恋路のたすきかけさし、我もいもせの苗
 代に水かけて帰れば、下女は一時経て帰りみだけし髪もすぐに臥
 ぬ。

二之巻終（10ウ）

卷三（副題：片手綱）

宇津山小蝶物語第三巻目録

三年の夏花

付まひものか花に短ざく
七夕に売かぢの葉
まことに内裏は恋のもと

身の上と知らぬ蘭

金刀も乞て見よ是はそも
問はせぬさきに語り聞する
だますに手なし後を見給へ

手替之三ヶ条

あまり早きも心もとなし
地藏様へは代参の十二燈
小声に成て愧かひた（1オ）

血はこいほどあかし
 関が原の三度、本美作の国久米の郡の何某成しが、慶長のころさ
 る子細ありて美濃に居住して、二代その子信ざへもん十六才より二
 十八まで、都紫野の辺に有職のために在京せしめ、藤波が姉を妻
 に求めたりしが、伊織は此ほど久くにて下りしゆへ、何が国もと
 にはうらしまが七世の孫に逢たるごとく、悦びのうへの饗心に終日
 のいとなみも跡たへて、焼平万介といふ二人の者を召仕ひ、今はむ
 かしに引替て宣ありげにくらせしが、川殺生も氣にそまらず虫見もい
 とゞしく、我むねの火かと思ひみだれて心うく、蟬の声のかれなく
 なるに連だちて、（1ウ）

秋はたゞゆふ間暮こそたゞならぬ

萩のうは風萩の下露

と詠ぜし歌は我ためか、露の命の雫さへかはく計にあくがれしに、此ほどは今をはじめの玉章を送り、いなせのなきにいとゞやるかた中だちも外ならぬつてなれば、問はぬもつらし聞もものうく、吉田の座舖にも長居ならず、度くに行も心はづかし、見通しの法印夢想をえたる手の筋、五音の声明墨色で知る一代記。日比は女子共の言事可笑かりしに、そろくとおしからぬ包銭、なぐさみかてらに合ふもふしぎあはぬもありそふな事。鳩鳩はつねさへいやらしき声じやに、はるかの盛みにひゞきの残るさびしき、野寺の開帳に心をよすれば、(2才) 有無両縁法界の水施餓鬼の音も、君の様ことばに懸るまでは忌々敷て光陰を送るに、恋にたへなるおばの藤波、折ごとに呼に遣ひ物がたりのなだれ込には、「そもじの文は『成程まづ余所の噂にして渡し、則読れたまでぬしが見た』といはしやるが、あの子は大体のこしやく者でなさそふなにより、難儀の灘に草臥の瀬戸を越ずばなるまひ。先よかれあしかれ、一度返事をとらねばならぬ」と言て枕くだいていやしやるほどに、「頼もしふおもふて待給へ。惣じて恋は無量なれども、おもひふかくしてこひこがる、事しげきをいみじとする。互に我ま、なるわざは、その本はさのみ深からねど、大やうは世わたりのまじはりばかりなり。さはあれども、其身になりてはせつにやるせのなきもの(2ウ)なり。恋に休まぬこそ恋知りといふべし」など、ぬれにあやしくなぐさめてなだめすごせしは、己が情のしるふかき品を言に包む風情、さながら紅を芳野紙につ、みたるにひとし。姫君はいとけなき比よりも父母の御いとおしみ深きがゆへに、愛し給ふにも「能子じや程にうつくしき男を持たしよの。いや嫂入さしよの」とたはむれ給ふにより、漸く七つの八つといふころには、早おとこ持身の躰がた、そろく智恵つきて、下心には天晴澄渾る世なりとも、賢臣二君に仕へず、貞女両夫に観ゆまじきと女自慢の根こゝろに、彼かりそめの約束は親のしわざゆへ、心もとなきにもせんかたなく、「若此

男形はともあれ、心体でんぶ野人には有まじきか。たとへ親の命に(3才) 背くとも、成人の後すべあしくば我男には持まじきものを」と覚しめすも外になり、却てむかふよりへんがへをせしにより、いふばかりなき口おしさ。「此ごとく人の心の替る物かは。とかく浮世はたのまれず。何の瑕もなきものを、一度いひ号有し女と沙汰しられ、最早女の名さがりなり。とかく此生は捨りたり」と、下心のとくるひまなく、遅なはらぬ後の世をねがひ給ふも、本はふかき恋ゆへなり。誠に其面質にして裏には仁義を厚く、あしたには神を祈り夕には仏を念じ、花月詩歌のもてあそびも穩便に催し、熾成を退き衰るに憐愍ふかし。此ほどは、源七が何となく御目にかけし艶書を屢々御覧じ、「いまだ捨がたきは恋路なり。誰人かしらねども、定てかりそめの縁に(3ウ) 【挿絵】(4才) 深きおもひとこそ見えたれ。幸手跡も見事じやが、いかなる人が此文を受るぞや。かならず形ばかりにて実なきものおほし。我身も出家の望あれどもいまだ俗の中なれば、此やうな文など取あつかふも、おのづからおもひたつ道の障とはおもへども、あゝ人のこゝろが打わりて見られる物ならば、一度はたづさはらぬも、いとほいなく成はてし我身のうへや」と覚し召時は、残暑の褥にも何者やら物をおもはし、寝入らぬ間もいかにひさしく、主しらぬ文をたみつすがみつうち詠め給ふ。漸々御顔も紅葉して、轡虫を誑くものごしもおつに成こと、たひくことなる次第なり。もつともなるかな、生としいける者、妻愛のみちはだれ教ねど、奥州薩摩のはて迄も指手引足に是を忘る、はなし。まして万物の(4ウ) 司なる大内のことわざまで見聞なれ、人よりさどく生れつき、浅からぬ情をふりすてんとは、心ながら残念ならんかし。



図7 卷三 4才

東雲のほがらくと明けけば
おのがきぬぐなるぞかなしき

言語道断の御腹立

同き十六日、外母がもと二条河原町、しかも二階から一目に北山が見え申に付、「送り火御けんぶつに御出」と申越せば、本よりはは無玉祭の無常の沙汰思召たち給へば、いつも替らぬ源七殿其外下女一兩人あいそへ、戸鎖まへより御出なり。うば何かと奥底なくかしづきまして、妻戸をひらき風をはこばせ、清水を結びて庭をしめし、心よげに御馳走申せば、下女はしたはびらくと門に(5才)出込に奔、我有がほにたち遊ぶ。源七は台所にすはり、西瓜に不調法な彫物して居る。軒の下は花火線香うり二人づれの伊勢嶋ぶし、二階にて外母何の遠慮もなく、「御姫様に少申たき事御ざります。日外源七どの御まへに余所から文言伝い進せられたげな。其御返事を『そよ』とあそばして遣はされませ」といふ。ひめ君御顔を赤め、「又うばのわけもなひ事いやる。みづからが心は、誰よりもそなたはやう知ていやらぬか。源七におひてそのやうな後暗い事しやる人にてなし。夫は内裏の中にてひらふておじやつたげな。此源七」と呼び給へば、源七罷出「其事でござります。それは成ほど去方より御前の方へ参りましたを偽て御めにかきましたほどに、どふでも其御返事をなされませ。おうばどのも合(5ウ)点でござります」といへば、「扱も源七そなたは狐が付たか。おれが事よふ知つて居て、人にこそよれ此やうな使ひをする物か、ただしなぶりやるか。早ふおじやいの。其文を引割てわが身に投付ふぞ」「これ御ひめ様、源七が筋なき事をとり持ませふか。此二三年も何と御まへの御出家の御望みも人はしらず、方々から此源七が口を筆ります。もとより簪君もさまぐのが御座れども、先様の男の思ひ入まは氏すじやうに付、耳よりなは人に語らず聞まずれども、御前の

殿に成べき仁がなさに過行しました。誠に御後紐から付添ますれば、御為ならば一命をも惜しむ心で御ざらぬ。此たびのはなるほど見る影もなき人でござれども、いかにしてもわしが見上た所があり候。氏は御前に優とても乙目はござらぬ。此源七無端も(6才)たのまに申事ならば、少しはまた御聞入れも有さうな事」といへば、「いかにも、わしも御前のために、月に幾日神仏へ参るやらしりませぬ。此度の事も、こなさんわしがあだに骨折た事ではない。御ひめ様何とて御ざんす。わしにも隙を下されませ」と、日比の奉公ぶり爰なりと、本よりしくみをきたる事なれば、うらみつわびつ、からの大和の引ごとを出し、いぢりにいぢりて真事やかになやしかけ、せきを打つてめかくれば、「扱も迷惑な事じやぞ。理を詰ていやれば尤なれども、おれじやといふてどふせうぞ。そないにわが身たちの腹たてやれば惜しひ。それなら源七、(6ウ)返事さへすればよいか。機嫌をなをしやるか」「はて御返事をなされ下されませれば、先一度の一ぶんたつと申物で御ざる」「そんならば返事をやるけれど、こちやしらぬほどに」其時兩人顔を見合、「それも少優がたに、いとらしくお書なされませ」「くそ無利ゆひどもが」とて、やがて御兒をそむけ、欄干に御手を掛うつむかせ給へば、源七は下へおり煙草吹て居たりけり。うば料紙硯をとり出しおそばに寄、「是なされませ。かまへて兩人ともに、おまへがおいとしさに申ますぞ」とわき腹を突けば、「忝辱でどふもならぬわいの」「はて源七、わしになにのはづかしい事が御座りますぞ」といふて下へおり、暫くすればうばをめて「最早おかへり」と仰ければ、飛であがり「今の(7才)ものは出来て御ざりますか」「それ文匣の中に申すぞや」と常よりもゆとりなく御帰り、源七御内まで御供して帰

り、羽織脱て投遣り、飛ぶかごとくに泥みたる人の元に走行、ことばせはしく有増を語りかの文をわたせば、伊織がうれしさ夢に酒呑こ、ちして、「忝」と三度いたゞき、手もとさながら一の富をつき得たるにことならず。「南無帰命頂礼愛染明王結神願成就なさしめ給へ」と、秘すべき挨拶ならねば、押ひらきて見れば、

主しらぬ、香はにほひつ、秋の野に、誰がぬぎかけし蘭、そも身のうへとはおもひもよらず、御遊みながめ入候所に、今はいとふあだなり参らせ候。とりわきて御(7ウ)返事とは、何ほどか心の外に候へども、たゞ一度のいらへなくば、源七「自害せん」と申につき、「毎にはまたもや御文など下され候事も御ざなきやうに」とぞんじ、御はづかしさかず／＼に候へども、一たびはことほりを書進じ参らせ候。まことに人らしからぬみづからに、浅くもあれ覚しめしより、御筆の黒みたる御事、かたじけなきと申たく候へども、わたくし事は、源七によく／＼御たづね下さるべく候。世の雑のなり申やうなるものにて御座なく候間、聞しめし分られ、げん七が御たのみのかいなき事御免しなされ、何事も／＼皆御ゆるし下さるべく候。若またかさねて御文下され候とても、なんぶんにもうけとり申さず候。もとより(8オ)返りごともかたくいたし申さず候。後ほどつらくなり参らせ候ほどに、御悪しみの御心におぼしめしきどつられ、たゞ御免しなされくだされ候べく候。かしく。

おもひつかぬ御かた様へ

てうより

伊織繰返し読みて、「是ほど烈くあるべきやうにはおもはずりに、またもやとりつき給らんや」と留息ついていへば、源七も「首尾せずながらも、いますこしは品あるべき」とはおもひしに競後せしが、よほど目鼻をしかめ、「いかゞとはおもへども心よはし。また追返し書給へ。叶はぬ迄ものちにつかけ、文は返し給ふとも読せなどか置べきか」といへば、好清これに力付、(8ウ)「此うへは

恥に血筋を晒すとも、なじかはちぎれてのくべき」と、又こま／＼とぞ書たりけり。源七是をうけとりて帰り、昼夜袖に入れて心につかけ、折を見て指出す。君多しやくもなきそぶりにて、「はてまたつがもない物を取ておじやつた。最早来ぬやうに書てやつた、またおぬしの一分も立やうに書てつかはした程に、其返してたも。おれはうけとらぬ」とて、んとし給ふを、むずとつかまへ引とゞめ、「是ぴんとこな様。何と書てお遣りなされても、先からわしを人とおもふて来せば何としませふ」「それなら、なんぼわが身のかたへきたとても、みづからが請とらざ何としやろ」「そこをうけとりて下されませい。最前にも申ます通に、只わしが邪魔(9オ)をなすやうにおもへば気毒に御ざります。なるほどわたくし方へ来せば、うけとらねばなりません。請取ておまへに届ねば、事によつて源七には身のうへの大事が出来ます。届てやろといふ誓言を立てをきました」「おれが心も知らひで、なぜにおしつけた誓言をしゃつた」「さればこそ随分御心は優しくぞんじておりましたによりて、『殊に源七が申事御聞分なき事は有まい』と存ました。是どふでもわたします」とて、御懐にをしこみ、ついとのおく。君も、そのま、捨をき給ふも、源七が身のうへ心もとなくて、やがてひらき給へば、

さぞさこそさほどまで、御うたてしく覚しめし候にも、縫縫中立ゆへ、先以御手跡を下され、かたじけ(9ウ)なきにもありがたく、身をはなさず所持仕候。かた様の御尊も有増はうけ給り及候。わたくしとても真事しからず候へども、女中のさたとしては、此二年以前迄は、人の咄しも聞につらきやうにぞんじ居申所に、日外嘘嘘の藪陰なる男まれにし御寺にて、仮染に君を拝みそめ、小縁にも忘れられず、三世の事迄ふつ／＼と打わすれ、積るおもひに此ほどは、いたづらにこがれ死ぬべきやうに成参らせ候により、人目も忘れ申候。是につけても、貧しきほど悲しきものは御ざなく候。居勢ある身なりせば、源七ど

のにはたちなく知付申事に候へば、君を伊美むかへと奉り、仮令御心には入らずとも、直につれなき御言になりとも懸り（10オ）

【挿絵】（10ウ）【挿絵】（11オ）なば、死ての四手の山みちも足軽く行べきに、何をいふても数ならぬ身は心にまかせ申さず候。もつとも御取あげはなき事に候へども、君には数の恨み御座候。人のうらみを請させ給ひ、その心をもほどこしなく、くもりし我をも晴らし給はず、人をいため給ふ事、今生何と送りますすとも、酬はん君が後のせこそ、我一人のみかなしけれ。

一首
音にきく粟の鳴戸の波風も
わがむねにたく火にはもののかは

一首
わがむねにたく火にはもののかは

古歌

我袖のなみだにやどる陰とだに
知らで雲の月やすむらん

姫君前後を心静に御らんじ顔打赤め、「何とありとも（11ウ）かまふまじ。いやまでしはし、此うらみと有は安からず。何条これ計の一通りいひわけせばや」と覺しめし、「人に無実をいひかけられ、捨置んも口をし」と御こゝろせきにせき、何の多しやくもあらはこそ、「二度とは御文をもうけとるまじき」と存候へども、無利様に申につけ、みればかずくの御ことは、何事もわが身にそまず候へども、爰に一つの不思議あり。みづからに御恨とは心えず。後の世を願ふ身の、此事計は聞とけ、訛りあらば御託言

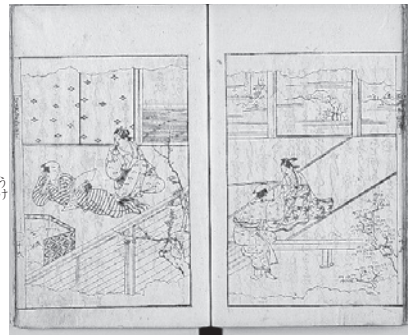


図8 卷三 10ウ・11オ

を申べし。身におひて覚えなし。白地にきかさせ給へ。外の事はあだなり。
と遊ばし、国定に渡し給ふ。余り返事のはやさに、源も（12オ）覚束なくおもひしかと問べくもなく、いそぎ中松が方へ遣はしけり。扱こそとひらき見て、「扱も苦々敷文章かな。是こそ恋の橋柱」とやがて一間に引こもり、しめつゆるめつする墨の、筆も料紙も俯拝み、言葉短く恋深く、もたれぬやうにぞ書たりけり。
うつ、なの、賤が心や、はげしなく、あたらせ給ふもにくからで、我うらみ御おほへ御座なく候よし、さりとては情なき御言の葉にて御座候。申さずとも、そのかくれ御ざなく候へども、御尋なされ候ほどに、百分一ほどかきつけまいらせ候。願はくは、是は密言の床にて申度事なれども、

一 君はまづ何とて、そのごとく無心く最愛らしく生れ（12ウ）つかせ給ひ候ぞ。是恨みの第一なり。
一 其御伎倆何とて此男めに御見せなされ候ぞや。是が二番のうらみにて御ざ候。

一 わたくし義、近きころまで何心もなく、正に童子より罪少くして、阿弥陀のもち遊びにまかり成居申候ものを、何ゆへにかくのごとく色欲にふかく、剩なるほどぞく才なるものを、次第く贏瘦やうにあそばし下され候ぞ。是うらみの第三なり。

右此三ヶ条の趣、急度一二にうけ給はりたく候。其外は何ほど書ともつき申まじく候。いとしければこそ、しと、打とや。かの誰やらが、「敷けとて月やはものをおもはする」と、墨染の身にていはれしも、我身のうへに今ぞしる。（13オ）
庭におつるちりく草の露の間も
身をほそめてぞ月はやどれる

心つよき君へ

恋しづむ身より

封じ目炙りてつかはしけり。姫君まぢかねてこれをうけとり給ひ、よみ給ふと見えしが、何の御言もなかりけり。高はし心もとなく三四月もすぐれば、比もはや七月廿三日、「何がな」とおもひ小聲になりて申けるは、「御うばのかたより『御地藏まいりなされましたら、少御立よりあそばすやうに』と申てまいりました。それにつきまして、彼事は何となされて御やりなされます。此中の返事もまち兼ねて居ませうが」といへば、「此中のは別に返事する事はない。何事言て来てもかまはぬ。源七、拝ぞ、かならず〜(13ウ)取ついでたもんな。たとへわが身の先度のやうに腹立やつても、おれは請とらぬぞや。地藏まいりも今年はずまひ」と言すて、持仏堂の方へ行たまへば、源七も倦はてけり。ふささきのたんかい公は、海底の龍宮にとられにし玉をさへ、幾千万の世話をやきて取かへし給ふとかや。源七もうつかりと其分にして捨をかれず、又うばがもとへ行て、「此ほどの文、両方ともに見ませなんだが、かやう〜のしがくじやほどに、此たびはあり様うけとりて今一度わたし給へ。あの様子では、おれが手からはさだめて請取給はじ」といへば、「いかにも心得ました。何ほどつれなくましますとも、さのみ我ま、はいはせまじ。あれほどの小心に(14オ)もま、ならぬは此道ぞかし。一まづわらはにまかし給へ」と、伊織がかたへをとづれたのもしく取成せば、もとよりてんがうにも書ちらして居る事なれば、「先もつて忝なし。いか様御兩人次第、海山をかけてたのみ申」と、片わきへねころび、こま〜と書て渡しけり。外母これを袖に入、「扱も愛らしや。何とぞしてにこやかなる便りきかしましよ」といふて帰りけり。

三之巻終(14ウ)

注

- (1) 森田吟夕について、鈴木行三『戯曲小説近世作家大観』(中文館書店、一九三三年)に「西鶴名残の友」に見えたる俳人吟夕と同人ならば、阿波の徳島の人なるべし(三七八頁)との記述がみえるが、「西鶴名残の友」の吟夕は富松氏であり居住地も異なるため、同一人物かどうかは定かではない。
- (2) 『戯曲小説近世作家大観』には正徳二年版の存在も指摘されているが、他の辞典類の解題等では触れられておらず詳細は未詳。現存する諸本にも正徳二年版は確認できない。
- (3) 暉峻康隆『江戸文学辞典』(富山房、一九四〇年)一〇五頁。引用に際して漢字を通行の字体に改めた。
- (4) 『浮世草子大事典』(笠間書院、二〇一七年)一四一頁。「宇津山小蝶物語」の項目執筆担当者は倉員正江。
- (5) 『日本古典文学大辞典』第一巻、(岩波書店、一九八三年)三〇〇頁。「宇津山小蝶物語」の項目執筆担当者は尾上新太郎。
- (6) 以下、作品の本文や挿絵の引用はすべて、翻刻の凡例と同様の方針で行った。ただし丁移りの表記は省略した。
- (7) 『浮世草子刊行会叢書』巻一(浮世草子刊行会、一九一六年)。なお、本書の底本は平瀬新右衛門(赤松閣)版である。
- (8) 国立国会図書館デジタルコレクション上では、「宇都山小蝶物語」として登録されている。
- (9) 片桐洋一ほか編『新編日本古典文学全集12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』(小学館、一九九四年)による。

付記

本稿は、日本学術振興会の科学研究費助成事業(研究活動スタクト支援、課題番号22K20014)の成果の一部である。